

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話:070-1503-6401/044-988-0004

http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo

第138号

草創期の
柿生中学校 - 8

『うれ柿』と学校生活の思い出……その2

小林 基男 (柿生郷土史料館専門委員)

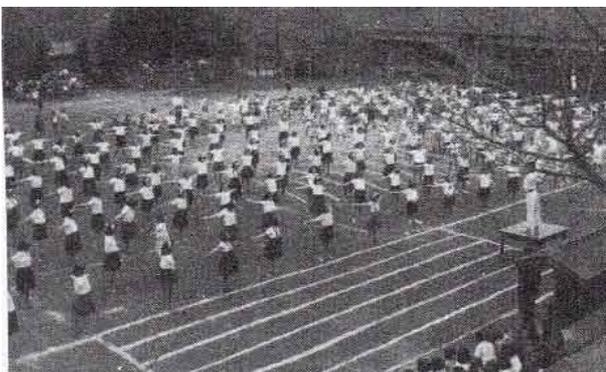
部活動と体育行事

校舎は間借りで、満足な運動場もなく、手造りの新校舎の建設が始まると、その手伝いも授業の中に組み込まれるなど、教育課程も手探りの状態でスタートした中学校生活でしたが、そうした中でも、比較的家の手伝いの少ない農閑期などの放課後を使って、2年目の昭和23(1948)年度には、早くも部活動がスタートしています。男子の部活では、何といても野球部が花形で、『うれ柿』第1号は、「部員数は100名になんなんとしている」と記しています。この年昭和23年度は、新1年生を加えて初めて3学年が揃ったのですが、3学年合計の生徒数はピタリ290名でしたから(男女別の生徒数は不明)、男子生徒のおよそ7割が野球部に殺到したのです。練習場が十分にはなく、練習も毎日とは出来ない環境にあっても、それでもボールを追いかけて動き回ることによって爽快感を味わっていたのでしょう。狭い校庭での週に2回の練習では、練習不足は明らかでしたから、川崎市の大会などでは出ると負けの日々でしたが、それでも大会などには、必ず出場していました。体育館もありませんから、他の球技も似たような状態でしたが、男女の駅伝部だけは、まだ自動車の少ない公道でいくらでも練習ができましたから、毎回好成績を残していたようです。

文化部の活動は活発で、社会科研究部や理科研究部の研究成果が、うれ柿第2号に掲載されています。それだけではありません。これは部活動ではないのですが、職業科の農業コースの生徒たちが、農産加工の勉強の一環で、味噌麴の製造法を勉強し、実際に味噌麴製造実習を行った実習記録も掲載されています。いずれも大変な力作で、生徒たちが調べにのめり込み、夢中になって調べた様子が良くわかる作品でした。味噌麴の製造実習は、10月25日から28日までの4日間を要し、この間午後10時や午前2時の作業が必要ですから、代表の生徒3人が、指導の中山先生と共に3日間学校に泊まり込んで、発酵に相応しい温度管理と水分調整を担当した様子が、リアルタイムで書かれています。教員が宿直を担当していた時代ですから、先生の泊りは珍しくないのですが、中学生が3日連続で学校に泊まり込むことが許可されていたのです。どんないきさつで許可になったのか、70年近い歳月を経た今となっては、調べるすべもないのですが、きっと2代目校長の小島喜芳先生の英断だったのでしょう。



家庭科の研究授業 調理室がないので、渡り廊下の庇を利用して豆腐作りの実習



第1回運動会(昭和23年10月)全校生徒の演技などないのですから、男子は上麻生から黒川分校(現在は青少年野外活動センター)を往復するコースで、女子は距離を短縮して実施されていました。沿道には地元の人たちが、手桶に水を汲んで待ち構え、応援してくれたと、懐かしそうに語っていただきました。黒川から徒歩通学の生徒もいた時代でしたから、全校参加のマラソン大会がきっちり実施でき、そういう積み重ねが、柿生中学校を全市の駅伝大会での強豪校に押し上げたのでした。(続く)

シリーズ
「麻生の歴史を探る」第107話

天明の飢饉 ～みさきの土塁～

小島 一也 (遺稿)

天明3年(1783)7月浅間山が大噴火を起こします。溶岩は麓の村々を埋没させ、熱砂は関東一円に三日間にわたり降り、農作物は大きな被害を被ります。この年は異常気象で、2月に江戸で大地震があり、4月から8月は大雨冷害、田植ができず、8月1日には台風が来襲、疫病も蔓延して飢饉となり、加えて天明6年(1786)関東地方は未曾有の大暴風雨があり多摩川・鶴見川は大洪水を起こしており、この浅間山噴火に象徴される天災は3～4年続き、これが世にいう「天明の大飢饉」で、幕府は農民に「粟・稗は勿論、木の実・草の根・稲藁は粉とし団子にして蓄えよ」と指示したとも伝えられています(読める日本史)。

当時の江戸は八百八町、人口百万以上、米価が高騰し、天明7年(1787)江戸市中の米屋や富裕商家に対する打ち壊し事件が起きます。登戸の豪商玉川屋弥兵衛方が襲われたのもその時で、村人は多摩川原に出て、ホウ貝を吹いて警戒に当たったともいわれ、一方天明6年の大雨は7月13日から17日まで降り続き、浅間山の灰塵で川底を高くした小河河川の堤防は決壊、惨状を呈しますので、窮状、難民は村内にも起こり、村の名主・村民は、年貢の軽減を領主に訴えるなど「前代未聞の騒ぎにして…」と市史(志村家文書)は記していますので、麻生の地方も大変な飢饉に見舞われていたようです。

この天明の大飢饉は、村の自治にも大変な影響を与えています。町田市史(渋谷家文書)によりますと、森野村(現町田市森野)では、名主、村役人により8か条の飢饉対策が定められ、その第1条には、正月春物の取り扱いは取り止めること。第2～3条には、奉公人に期限が来たら暇をやること、給金は男1両2分、女3分とすること。第4条では、寺院への付け届けは半額とすること。第5条では正月の松飾(幕の内)は3日間とし、4日からは農事に励むこと。第6条では、酒は一切飲まないこと。第7条では、警女(ごぜ 三味線を弾き銭を貰う女)などは泊めないこと。第8条には、大工、木挽(こびき)などの職人の手間賃は1日当たり100文とするよう諸事、自粛・俟約を取り決めています。このことは森野村に限らず、たぶん年貢減免の訴えで、天明の大飢饉は老中田沼意次の辞任、代わって松平定信(吉宗の孫)の寛政の改革となっていきます。

現麻生区細山に「みさきの土塁」と呼ぶ所があります。これは天明の大飢饉にこの地の大地主白井治良右衛門が、村人の困窮を救ったことから、後に村人が治良右衛門の恩に報いるため屋敷に土塁を築いたもので(細山郷土史料館)、現在その土塁は昔のまま残されています。場所は香林寺の裏の谷戸の小字坂東(観世音菩薩霊場の別名)の旧家、白井家の屋敷内にあります。この白井家は通称屋号を「みさき」と言われ(現当主は17代白井光一氏、治良右衛門の孫)、東南向き、舌状に張り出た約3～400坪の白井家の屋敷の3方は、底辺4～5m、高さ約3mの梯形の土塁で囲まれ、土塁の1辺の長さは3方に分かれ、長い所で約40m。特に風当たりが強い辰己(東南)の方角は角に曲げられ補強され造られています。



白井家に残る「みさきの土塁」

細山村は新編武蔵風土記稿に「村の地形細長くして、その地はすべて山上なるをもって起こりし名なり」とあるように、東西25.6町(約2.8km)、南北18.9町(約2km)、戸数59軒(天明年間)、石高200石、うち水田は僅か88石で、米で納入の年貢は厳しく、足りぬところは麦・粟・黒川炭で補ったとされ、ただでさえ厳しい村の生活の中で、飢饉ともなると、暮らしに苦しむ農民が出るのは当然のことでもありました。

飢饉が去っても、貧しい農民には治良右衛門の恩義に報いる「物」は何もありません。そこで考えられたことは、白井家の屋敷は東西の風当たりが強く悩んでいたことから、これを防ぐ土塁を築こうとしたもので、百姓が持つものは畑の土と、自分たちの労働力。限られた人数で、あの大きな築塁に要した歳月はわかりませんが、農民と地主の扶け合いの温情が、今に残るのは大変貴重なものではないでしょうか。

なお、この白井治良右衛門は、村内数か所の谷戸川に石橋をかけたと言われ、安永7年(1778)建立の、石橋供養塔が香林寺境内に残されています。

(参考文献)「細山郷土資料館発行文書」「読める日本史」「町田市史」「川崎市史」

シリーズ
教育の歩み 第2部

学級の誕生(8)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆ニューカッスル委員会と改正教育令◆

教育サービスの品質をいかに確保するか。議論を重ねたニューカッスル委員会は、教育に対する国庫補助を整理して、1860年に教育令を出し、62年には改正教育令を出すなど、矢継ぎ早に改革を進めました。まず、学校建築費補助金に加えて、次第に拡充されてきていた「経常費補助」は、生徒の出席状況と学習内容の修得度、教師の資格などによって、学校管理者に支払われることが明記されました。そのため、学校が生徒たちに伝授すべき学びのスタンダードが定められたのです。こうした上で、各学校の実情を精査する監督官を設け、補助金の支給を梃子に学校現場の効率的運営を実現することを目指したのです。

こうした観点から、改正教育令は、教育内容を思い切って絞りこんだ点に、大きな特徴がありました。当時の学校は、「内外学校協会」系も国教会系の「国民協会」系も、読み、書き、計算のほかに、フランス語、幾何、文法、三角法、線描、音楽、地理などまで教えるようになっていたのです。改正教育令は、こうした多様化して増え続けていた新しい教科を無視して、再度教育内容を、読み、書き、計算の三要素に限定したのです。その上、この三要素全てについて、次のような六段階を定めたのです。この六段階の一つ一つが、一年間学び、修得すべき内容とされたのです。下の表をご覧ください。

この表の各段階は、6歳から11歳の年齢に対応して設定されていました。生徒たちは、これらの各段階を1年間学び、最後に修得状況を調べる試験を、一度だけ受ける機会を与えられたのです。六段階の区分と年齢との対応、各段階での試験の一度だけの実施は、事実上六学年にわたる初等学校制度の始まりを意味し、ここに、学年制に基づく学級制が実現する方向が見えてきました。

さて、国家はなぜ、教育内容をここまで絞り込んだのでしょうか？ それは、あれもこれもと、メニューを多様化してしまうと、かえって中途半端になってしまい、生徒たちの理解が十分に届かないままで終わってしまうことを警戒したからでした。現実のところ、「見習い教師」制度の拡充は続いていましたが、有資格教師の人数は、まだ大きく不足していたのです。そのため、モニターと大差のない見習い教師が数多く残っていたのです。このレベルの見習い教師に、多くの授業を担当させることには、無理がありました。あえて、読み、書き、計算に教育内容を絞り、しかも決して高いとは言えない水準を、スタンダードとして設定したことは、そこまでは確実に教えるという、一種の修得確実性への約束のような意味を持ったのです。

しかも、このスタンダードは、補助金支給との関係で、学校に対する強い強制力を持っていました。補助金の支給は出来高払い制に改められていたからです。年度の終わりに監督官による試験が行われ、読み方、書き方、計算の全てに合格した生徒数と、年間50%以上出席した生徒の数を基にして、翌年の学校への補助金額が算出されたからです。

(続く)

読みの段階	1	単音節の言葉が読める
	2	学校で使用される初級読本の中から単音節文が読める
	3	学校で使用される初級読本の中から小段落が読める
	4	学校で使用される上級読本の中から小段落が読める
	5	学校の最上級クラスで使用される読本の中から詩が数行読める
	6	新聞記事等の現代文から一段落が読める
書きの段階	1	口述した大文字、小文字を石版または黒板に筆記体で書ける
	2	活字体で書かれた文字を筆記体で書写できる
	3	読み方の試験と同じ段落からの一文をゆっくり1度読み、次に1語ずつ書き取ることができる
	4	読み方と同じ読本から、ただし既に読んだ段落以外の一つの文章を、一度に数語ずつゆっくり口述筆記できる
	5	学校の最上級クラスで使用される読本の中から、一つの文章を一度に数語ずつゆっくり口述筆記できる
	6	新聞等の最近の読物の中から、普通の長さの段落を一度に数語ずつゆっくりと口述筆記できる
計算の段階	1	20までの数字を黒板か石版に口述筆記する。20までの数字を読む。黒板に書かれた例題から口頭で1桁の数字を足し引きする
	2	簡単な足し算と引き算、九九の表
	3	短除法(12以下の数で割る割り算)までの簡単な計算問題
	4	複雑な計算問題(お金の単位を用いて)
	5	複雑な計算問題(重さと長さの単位を用いて)
	6	実用計算または売上伝票の計算

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

11月 3・10・17・24日(毎日曜日)

12月 7・14日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時

(12月21、28日は休館です)

第17回 特別企画展

「江戸時代の道中記を読む」 ～ 古文書輪読会の学習の成果から ～

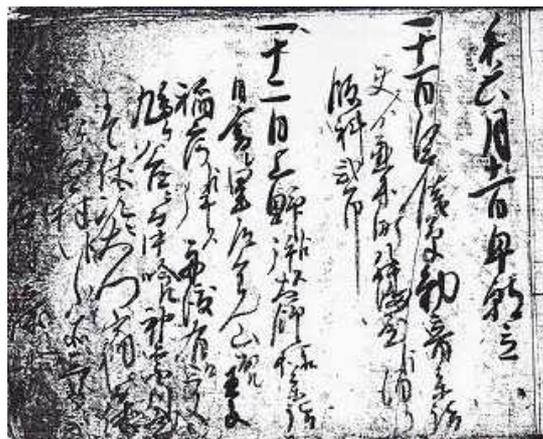
当館主催の古文書輪読会では、旧王禅寺村青戸家に保存されていた『道中記』2点を寄贈いただき、読み進めています。

今回はまだ途中ですが、その内容の一端を古文書解読文に地図や資料を付けて紹介いたします。

寛政10年(1798)の旅は80日余りの大旅行。旅人は毎日どのくらい歩いたの? 参詣した寺社はどこ? ……私たちの今の旅との違いを実感していただければ幸いです。

期間 10月5日(土)～2020年1月26日(土)

会場 柿生郷土史料館特別展示室



第82回 カルチャーセミナー

海を見おろす縄文人 ～川崎の貝塚文化を語る～

講師の村田先生は、何度も史料館での講演をお願いしておりますので、ご存知の方も多いと存じますが、長きにわたって川崎市内の遺跡の発掘調査に関係され、早野や白山の横穴古墳の線刻画の発見、橘樹郡衙遺跡群の諸施設の発掘など、大きな成果をあげてこられた、川崎考古学の泰斗でいらっしゃいます。その先生に、今回は、川崎駅地下街アゼリアの貝塚遺跡の調査に、古生物学の松島先生と共に取り組まれた成果を発展させ、縄文人が海とどのように関わっているのか、どのように認識していたか、お話しいたします。

日時 : 11月24日(土) 午後1時30分
～ 3時30分

講師 : 村田文夫氏 (考古学者)

会場 : 柿生郷土史料館特別展示室

縄文海進と子母口貝塚

— 先史時代の川崎の海を復元する —

松島義章 村田文夫



かわさき市民アカデミー

川崎学双書シリーズ4

柿生郷土史料館友の会へのお誘い

柿生郷土史料館では友の会への入会を常時受け付けております。

手作り史料館に参画しませんか。

会員には「柿生文化」の送付や各種イベントへの優先受付、蔵書貸し出しなどの特典を用意しております。この機会にぜひ入会をご検討ください。詳細は直接当館にお問い合わせいただくか、ホームページ <http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo> をご覧ください。